

大濱信泉プロジェクト『勇気づけの教育』の推進 (34)



～ 子どもとの関わり ～

白保小学校 校長 入嵩西 清幸

「やがて ぶつかりそうになった！」ある日曜日の午後、スマホ越しの声は、白保のYさんだった。

「白保集落内の十字路で小学生が乗っている自転車とぶつかりそうになり、左右確認もせず、そのまますごい勢いで通り過ぎていった。」という内容だった。しばらく話を聞くと、誰か見当が付いたので直ぐさま白保へ向かった。案の定、数名で遊んでいた所を見つけ、Yさんに直接話をしてもらった。それから二週間後、Yさんから「これなんか上等に自転車乗っていたから褒めておいたよ」との報告を受けた。地域の方がいつも「子ども達を見守ってくれている」という安心感で胸がいっぱいになった。翌朝、登校時に「昨日おじさんに褒められた？」と聞くと、うれしそうに「うん！」と一言。

最近、本を読む機会が増えた。本の帯に「50年考え続けた僕の『結論』というキャッチコピーの『教える』ということ」出口治明（立命館アジア太平洋大学学長/ライフネット生命創業者）さんの著書から三つの内容（一部抜粋）を紹介したい。①女性が出産する際には、脳内でオキシトシンというホルモンが大量に分泌されます。オキシトシンは、別名「幸せホルモン」「愛着ホルモン」「絆ホルモン」とも呼ばれていて、オキシトシンが体内で放出されると、母親は赤ちゃんと深い愛情で結ばれます。母親が子育てを厭わないのは、オキシトシンが分泌されているからです。一方男性の場合は、オキシトシンは自然には分泌されません。男性は、実際に子どもを育てる作業を通じてオキシトシンが分泌されます。つまり、「子育て」というプロセスを経ることでオキシトシンの分泌が促され、子どもに対する愛着が芽生えるのです。（科学的に見ても、父親が子育てをしたほうがいい）②「子どもを常時家庭に置いて、母親の手で育てないと、子どものその後の成長に悪影響を及ぼす」という「三歳児神話」は、教育学的な見地からも、脳科学の見地からも、合理的な根拠は何ひとつ認められないことが明らかになっています。既に1998年の厚生白書が、「母親が育児に専念することは歴史的に見て普遍的なものでもないし、たいていの育児は父親（男性）によっても遂行可能」と指摘している。（母親に子育てを任せるのではなく『集団で育てる』のが教育の基本）③数年前に、ある高校生と公開対談をしたことがあります。なんと中学生で会社をつくって社長になり、活動をしている女性です。中学生でベンチャー企業を起こした人と、還暦でベンチャーを創業した僕、という組み合わせで話をしました。対談の終わりにその高校生のご両親に対して、「どんな教育をしたのか聞きたい」という質問が会場から出ると、彼女はスッとマイクを取って、代わりに答えました。「お父さんもお母さんも何も言わなかったけれど、私がお菓子が欲しいとねだったときは、『なんでお菓子が欲しいの?』と聞いてきた。そして、なんで欲しいのかを説明できなかつたら、買ってもらえなかった」というものでした。「なんでしたいの?なんで欲しいの?どうして?」と聞かれたので、小学生のころからその答えを探すようになったということです。そうした経験は何も特別なことではありませんし、それがすべてではないかもしれませんが、彼女にとっては「自分の頭で考えて、答えを探す」ことが習慣づけられるきっかけになったのではないのでしょうか。そして、そのように「自分の頭で考えさせる」きっかけとなる問いかけは家庭の外で、つまり学校でこそもっともっと行うべきことではないでしょうか。

著書にある「お父さんによる子育て」、「お母さんだけでなく集団で育てる」、「小さい頃から考えさ

せる問いかけ」は、子ども達の自立・自律を促し、「勇気づけの教育」に繋がっていくものだと思います。先行き不透明な時代と言われる中、学校・家庭・地域の全ての大人が、これから必要とされる「持続可能な社会の創り手」となるような子ども達を日頃の身近な生活（学校・家庭・地域）を通して、根気よく一緒に育てていかなければならないと強く考える。

先日、本校創立130周年記念事業の解散総会を終えることができた。式典当日に参加出来なかった歴代校長宅へ伺い、感謝状等を手渡すことができた。あの頃の話をするとうるさくを思い出されたのか…。横から娘さんが「最近涙もろくて」と。歴代の思いも胸に、これからも日々奮闘！